

115. 坂田郡近江町奥松戸遺跡 発掘調査抄報

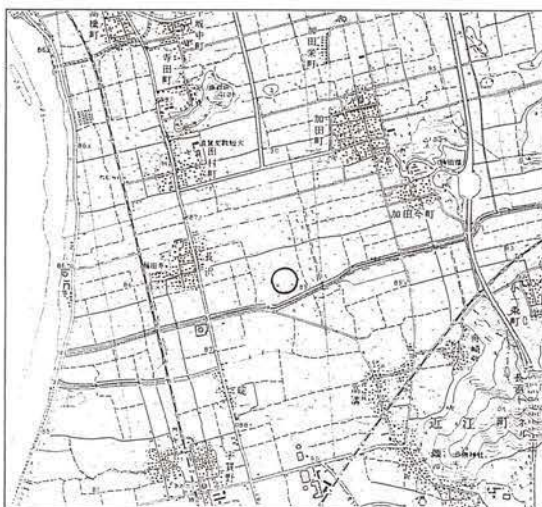
はじめに

国道8号線長浜バイパス工事に伴う関連遺跡の事前発掘調査は、1981年度の試掘調査を経て、翌1982年度より西火打・奥松戸遺跡の本調査にはいった。両遺跡は坂田郡近江町長沢の集落の東約1kmに位置し、それぞれ現在は水田、畑地、竹林と化しており、標高87～88mをはかる。

1982年度調査では西火打遺跡において、平安時代の水田跡、曲物を利用した井戸(径約40cm)、土壙等を検出した。また、奥松戸遺跡(A～E区)では、土川沿いに弥生時代後期～古墳時代初めの土器及び木製品を多量に包含するスクモ層、弥生時代後期の溝状遺構(幅1.5m)、平安時代末の掘立柱建物跡4棟(いずれも2間×2間の総柱で柱間は6尺をはかる)等を確認した。

本年度調査においても、これらとの関連遺構の検出を期待した。特に奥松戸遺跡は畑地、竹林をなす微高地を中心に方一町の寺域をもつ寺院跡に推定されており、その痕跡を追求すべき調査ともなった。

現在、長浜バイパスの長浜市側についてはすでに共用され、1971年度に行われた発掘調査において川崎遺跡・鴨田遺跡・南方東遺跡等から、縄文土器、弥生土器・古式土器が多量に出土し、大集落の存在が推定されている。特に鴨田遺跡では、溝(自然流路)や沼沢地内より弥生時代中期～古墳時代中期の多量の遺物



遺跡位置図

の出土が報告されている。

調査結果

西火打遺跡の調査結果について簡単にふれておくと、調査区は東西約20m、南北約50mをはかり、昨年度調査区の西側にあたる。遺構としては耕作土直下から、昨年度と同様、条里制のものと考えられる地割り畦(10m余りの間隔をもち、さらにその間を小畦で区切る)、北東から南西へのびる旧河川を検出した。

今回は、この地割り畦に切られる形で2間×5間の掘立柱建物跡1棟を検出し、掘り方は一辺50cmをはかり、柱通りの方向は畦と一致する。また、径2.1m、深さ1.2mの土壙も検出した。土壙内からは弥生時代後期の近江系受口状口縁甕、直口壺、東海系の高坏、木製品数点が一括出土している。

奥松戸遺跡の調査は、土川北側の微高地上の畑地を対象に東西約25m×南北85mの範囲において行なった(G・H区)。確認された遺構としては、①方形周溝墓、②溝状遺構、③竪穴住居跡、④井戸、⑤掘立柱建物及びピット等があり、次にその概要を簡単に述べる。

①方形周溝墓 一辺約8mの規模をもち、淡黄褐色砂土より掘りこむ溝が四周にめぐる。7基が確認され溝は共有するものと、SX.4とSX.7のように切り合うものがある。本来、これらの東側にも周溝墓が分布していたものと思われるが、後の掘立柱建物の建造により崩壊したものも多いと推察されよう。SX.1、



奥松戸遺跡遠景(北より)

SX. 5の周溝内からは弥生時代中期に比定できる供献用壺形土器が出土している。口縁部は大きく外反し、端部は受口状に上方へたちあがり、外面に4条の凹線文、頸部に貼り付け突帯をめぐらせる。なお、主体部はいずれも確認されなかった。

②溝状遺構 新旧の溝が交叉して計14本検出された。時期は、弥生時代後期(SD. 1~6)、古墳時代初め(SD. 14)、奈良時代末~平安時代初め(SD. 10)、平安時代以降(SD. 13)の4期にわたる。調査区中央を南北にのび、ほぼ直角に西へのびる幅約2mのSD. 13は、時期・性格等は明確でないが、白鳳時代から存在したと伝えられる寺院の寺域を示す溝という推察もできよう。

また、SD. 1は幅0.2m、深さ0.1~0.2mと浅いもので径13mをはかり円形にめぐるが、どのような性格をもつものかは不明である。溝内出土の土器より弥生時代後期に比定できる。一部、SX. 5の周溝と重なり合う。

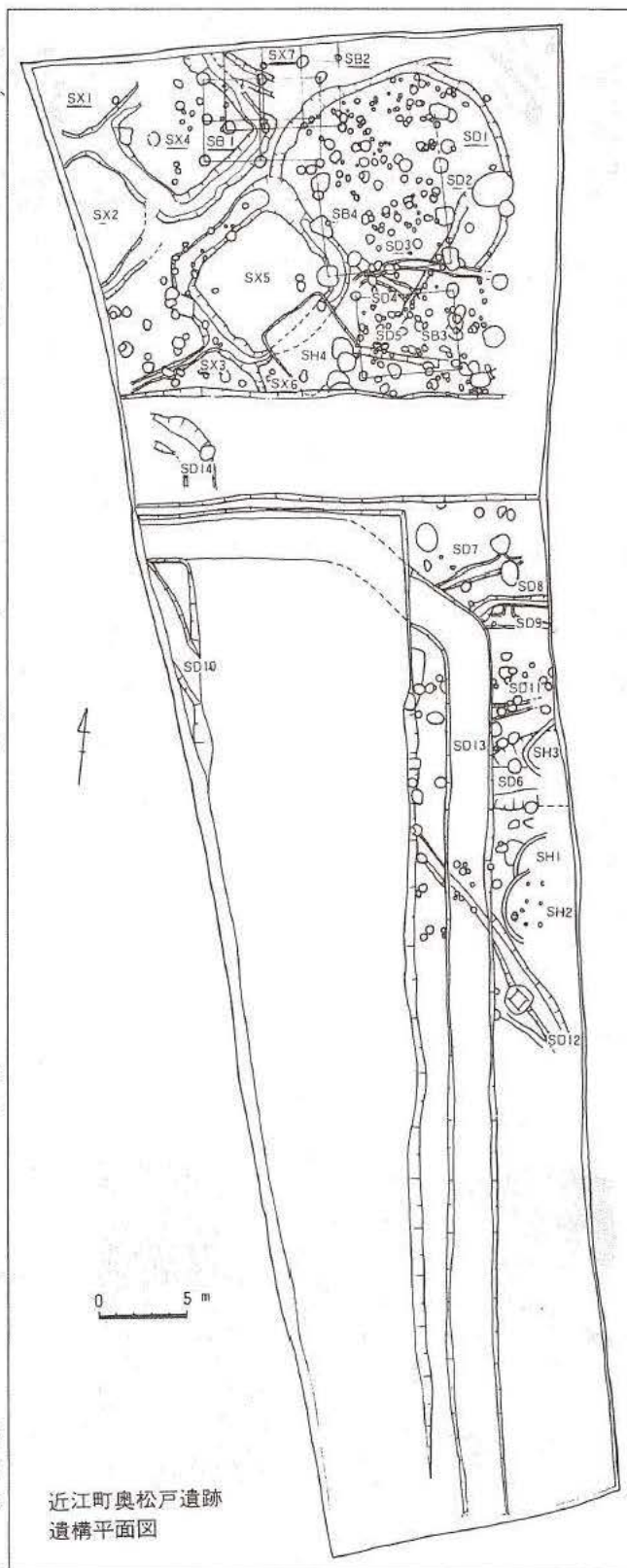
③竪穴住居跡 弥生時代後期に比定できると思われる円形に溝のめぐるSH. 1・2、古墳時代の隅丸方形のSH. 3、時代は下るが奈良時代初めの須恵器・土師器を出土する方形のSH. 4(4.0m×4.2m)が検出された。SH. 4はSX. 5の周溝を切りこんでいる。

④井戸 直径約1.5m、深さ約1.4mの円形の掘り方に板を方形に組み合わせたもので底にのみ板材が残る。井桁状に組んだものと思われ、底には小石を敷き、須恵器片を数点出土する。奈良時代末~平安時代に比定できよう。

⑤掘立柱建物及びピット群 北東側に集中して直径0.2~1.0mのピットを検出した。掘立柱建物跡は少なくとも3時期にわたり、5棟以上を数える。

建物の柱通りの方向が条里水田と一致していないもの(SB. 1)と一致しているもの(SB. 3・4)、前者と重なり合うもの(SB. 2)がある。SB. 1は2間×2間の総柱で倉庫跡かと思われるが、柱間が南東にくらべ南北の方が長い。SB. 2(2間×1間以上)がこれに重なる。SB. 3は2間×3間、SB. 4は2間×2間以上であるが、後者は柱間が約9尺、約12尺と広く、掘り方も一辺約1mをはかり、他の建物よりも規模的に大きい。なお、SB. 3と4は柱通りの方向が一致する。出土遺物等より平安時代後期に比定できる。

調査区中央より南半分の西側は、後世の攪乱

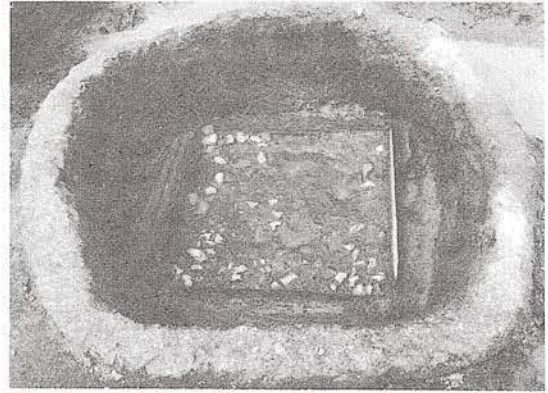


をうけたため、一段低くなり、はじめ遺構の残存は期待されなかったが、南東から北西にのびる自然流路かと思われる落ちこみを確認した。そして、その流路内のたまりとみられる暗茶褐色土より弥生時代後期～古墳時代初めにわたる土器が多量に出土した。昨年度調査時に確認したスクモ層に関連するものと思われる。

おわりに

本調査では、はじめに予想された寺院跡は確認されなかったが(瓦等の出土もない)、弥生時代中期から平安時代末にかけて連続的に営まれ続けた村落であるといえる。特に整然とした弥生時代の方形周溝墓は、さらに西側(路線外)へもひろがるかなり大規模な墓域であった可能性が大きいし、住居群の存在も考えられる。長浜平野内の弥生時代の数少ない生活遺構(越前塚遺跡・大東遺跡)として貴重である。

また、弥生時代後期から古墳時代初めに位置すると思われる多量の出土遺物も包含層内からの出土であり層位的におさえることはやや難しい感があるものの湖北地方のこの時期の土器編年及び土器流通(東海系・



井 戸

北陸系の鬘・高坏が含まれる)を考える上で貴重な資料となろう。

土川村岸の法勝寺遺跡で試掘調査によって奥松戸遺跡に類似した遺構等が確認されており、本遺跡の性格をさらに明らかにする上で今後の調査にける期待は大きい。(吉田 秀則)

116. 守山市吉身南遺跡の 大型竪穴式住居跡

昭和57年3月、守山市立埋蔵文化財センターでは、市の建設課が実施する国鉄守山駅東口広場整備工事に先立って、吉身南遺跡の発掘調査を実施した。以下、調査で検出された遺構について紹介しよう。

1. 大型竪穴式住居

調査地周辺は昭和46年まで操業していた煉瓦工場の跡地で同48年に再開発事業で区画整理とともに宅地造成され、遺構面までに約1.5mの造成土や煉瓦で覆われていた。当初、計画された道路部分(幅7m)についての調査であったが、住居確認後、調査区を拡張して全容を知ることができた。

住居の平面形態は方形で、東北東の辺が10.60m、直交する辺が10.75mで、各辺は中央でややふくらむ傾向がある。床面までの残存高は東辺沿いで深く、西辺でわずかに浅くなる傾向がみられた。床面には明瞭なかたちで支柱穴の位置が把握されず、住居の東辺に沿ってピットが2か所、南辺に2か所認められるものをもって支柱穴と考える他ない状態である。また、ほぼ中央に径30cm程の焼土があり、炉跡と考えられた。住居内中央やや西寄りの落ち込みは住居より若干後出の土壌であり、住居に伴うものではない。また東辺沿い外側の溝は切り合い状態が明瞭でなかったが時期的には住居跡より後出すると考えられる。

床面では遺存する遺物がほとんどなく、時期は明瞭に求めることができない。

2. 吉身遺跡群における本住居の性格

ここでは吉身遺跡群(吉身南及び吉身北遺跡を総称してこのように呼ぶ)の従来の知見から、どのように位置づけられるのかを考えてみよう。

まず、駅西では昭和48年に都市計画道(駅前街路)に伴って古墳時代後期の竪穴式住居7棟及び歴史時代と推定される掘立柱建物1棟が検出された(A地点)。

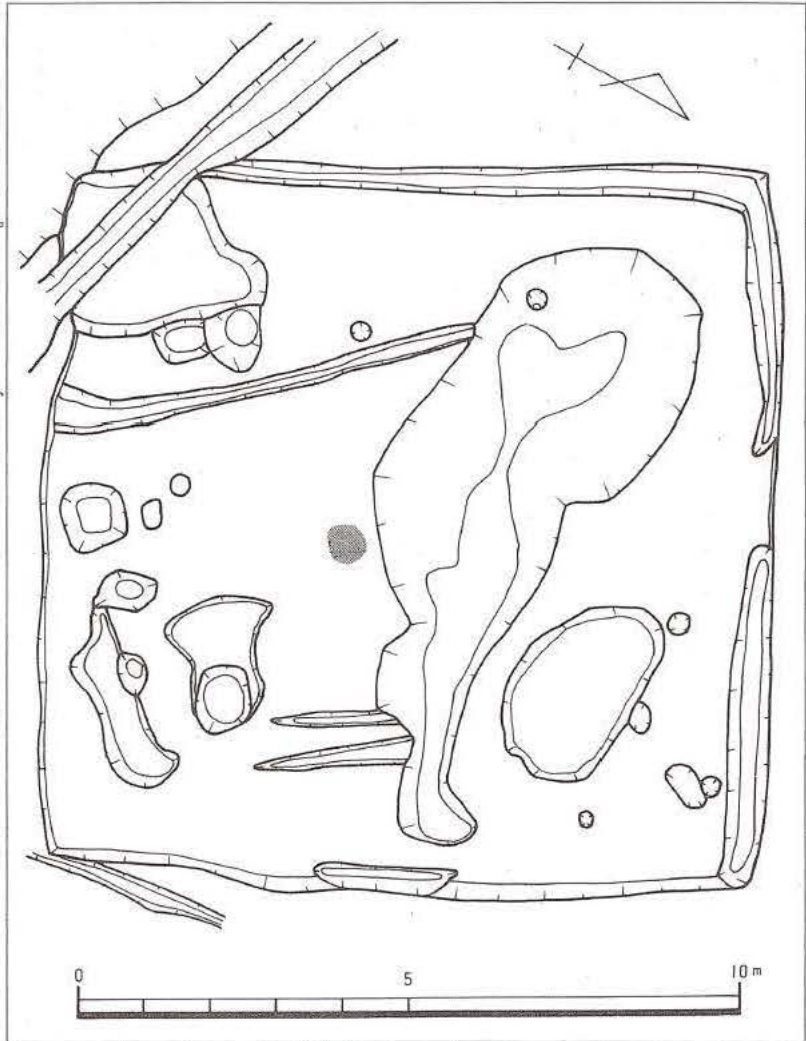
同街路の東隣で昭和56年に調査を行ない同時期の竪穴



位置図

■が大型住居検出地

式住居27棟及び掘立柱建物3棟以上を検出しており(B地点)、同年、駅前で1棟(C地点)と合計で30棟以上に達する住居を把握している。この中で竪穴式住居の一般的な規模は一辺が4.55m~6.25mである(吉身北遺跡)。一方、駅東では昭和54年に現在の「つがやま荘」の位置(D地点)で16棟の竪穴住居と1棟以上の掘立柱建物、同年に公共下水道に伴って5棟の竪穴式住居、昭和57年に東口でマンション建設(E地点)に先立って竪穴住居を22棟、掘立柱建物3棟以上を検出し、合計で40数棟に達している。ただし駅から東へ進む程、竪穴住居の重複が少なく、遺構も希薄となり、本大型住居の位置は遺跡のほぼ中央かやや東寄りにあると言える(吉身遺跡群中)。これら70棟近い竪穴式住居の規模は上記したように今回発見の約半分であり、本住居が極めて特異であることを示している。また各調査地点で6世紀後半代に掘立柱建物の出現も認められ、それら掘立柱建物(倉庫以外)に居住したと考える首長(支配者層)が大型住居を生活の場としたと考えるには矛盾が生じる。今回の大型住居に



吉身南遺跡竪穴式住居平面図

支柱穴の存在の薄い点が問題なのであるが、中央に炬を残す点、生活の痕跡が薄い(床面に遺物を残さない)という点、極めて大型である点から「吉身ムラ」の集会所という性格を付してみたい。

一辺5~6mの竪穴住居の居住可能人数は5~6人で妥当とすれば、一辺10mを越えるこの住居には4倍前後の数が計算上であがってくる。この数は「吉身ムラ」の長老や支配者層が現代でも行なわれている『直会』あるいは春秋の水稲栽培に関わる会議に該当させることが可能であると思われる。

なお、以上の諸点より本住居の時期は6世紀中頃に一応求められる。

3. まとめ

紹介した住居が極めて特大なことが判って頂けたと思われるので、本住居の性格についてももう少し説明を加えておこう。「集会所」という内容については若干

記したように、農民層を含む村落の成員のあつまる現代の「公民館」的性格でなく、支配者層の祭祀を行なう場、搾取手段、労役の提供などを義務化する方法等を考えた戦術、戦略的思考の場であったと考えたい。(山崎秀二・岩崎 茂・山田謙吾・岩崎陽子)

参考文献及び註

- A. 昭和48年『吉身北遺跡発掘調査現地説明会資料』守山市教育委員会 吉身北遺跡発掘調査団
- B. 未刊であるが、5世紀末~6世紀後半前葉の遺物がみられる(現在整理中)。
- C. 昭和58年『吉身北・西遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会 近刊
- D. 昭和56年『吉身南遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会
- E. 本調査ではDとほぼ近似する内容の住居跡で、一部玉生産を裏づける遺物がみられた。